

19

長谷川泰の晩年の生活及び人生の苦悩と
悟りについての手紙と詩文

唐沢 信安, 志村 俊郎, 殿崎 正明, 山本 鼎, 幸野 健

日本医科大学医史学教育研究会

① 済生学舎廃校後の長谷川泰

筆者の手元に済生学舎の医学教育を離れた後の泰の人生観を語る詩文及び書簡が沢山残されている。泰は長岡市郊外の静かな新組村を「桃源郷」と見立て仙人の住む所と考え、仙人達に会う為には、今日迄の一切の怨念を忘れ子供のような心境で理想郷の新組村に帰りたいと詩文に書き残している（故杉立義一先生所蔵の詩による）。

② 孫養子・長谷川亀之助に送った手紙

長谷川泰の一人息子^{やすさだ}保定は医師の道を求めずして趣味の写真の道に進んだ。泰は苦悩の末、東京音羽の佐藤獨嘯^{どくしょう} 禅師に最晩年の救いの道を求めている。そこで郷里福井村の親戚長谷川虎三郎の長男亀之助を孫養子に迎えた。亀之助の父は学校教師で亀之助は大変な努力家で、当時の長岡中学に通い勉学に勤む。「新潟県古志郡新組村大字福井、長谷川亀之助殿（大至急）」と書いた泰の書簡が数通ある。郵便為替で送金し（せっかちな泰は常に速達便を使用している。）、「去る20日の書留郵便にて為替送金せしも未だ受領書の返事なき、怠惰するようでは以後学費送り申さず候。早速返答いたさる可し。2月27日長谷川泰 長谷川亀之助殿」。又、泰は厳しいばかりでなく亀之助の成長を楽しみにしていた。「長岡郵便局にて受付、郵便為替金拾円也 ○下宿料 ○授業料 ○牛乳代 以上」

別便では「お母さんを大切にしてください」と記している。亀之助は長岡中学から更に、旧制金沢第4高等学校、東京帝国大学医学部へと進み、大正4年に卒業している。

③ 変人と称せられた泰の心中

世に変人と称せられる泰は豪傑であると共に一面寂しがりやであった。日本医科大学同窓会の展示室に次の意の詩文が飾ってある。「晩年を迎えると、何事もなく老い耽け込んで行く。然し窓辺の燈火で書物を読む楽しみ丈が残されている。世の人々は私の甚だ落ちぶれた姿を見て笑う。今宵も門をたたく風雨の音だけがするが、古くからの友人は誰も訪れて来ない。寂しいことだ」と。

④ 長谷川泰の逝去直前の亀之助宛の手紙

明治45年3月11日、長谷川泰は大腸狭窄症にて本郷元町の自宅で逝去した。享年70歳であった。最期の泰の様子が筆者の手元にある。柳子夫人が第4高等学校在学中の亀之助に宛てた手紙から知ることが出来る。「祖父様の事、本月10日迄は御快く居られ候所、11日頃より便秘と痛みがあり、大いに困り入り候。然し一昨日より少しづつ通じも付き、痛みも薄く相成り候（一部略）昨日来新聞に掲載され見舞人来たりて困り入り候。（一部略）腸の御病氣故、お食事はすべて流動物ばかりで、御力がつかず御全快までには早くとも3月中にはむづかしく存じ候。（一部略）2月21日。かしこ。長谷川泰_内 亀之助殿」

⑤ 長谷川泰の銅像^{こんりゅう}の建立について

時代は流れて大正5年4月5日、長谷川泰の銅像を全国の済生学舎の卒業生及び教師達は造り除幕式を行った。場所は旧済生学舎の跡地近くの本郷湯島天神裏の公園に造られた。長谷川泰の銅像は、羽織袴姿の威風堂々の東に向かって読書している姿で、巨大な石の台座の上に鎮座していた。

然し、第2次大戦中に国家戦力増強のため取り外され、撤去されて今はない。

⑥ おわりに

日本の医学教育の為に活躍した長谷川泰の晩年について報告し、その徳を偲んだ。